

臨床心理学における質的研究の特徴と展望

Trends and Future Prospects for Qualitative Research in Clinical Psychology

飯 田 昌 子 ・ 上 村 佳 代* ・ 平 田 祐 太 朗

I 背景と問題

社会が急速に変化し、生活世界が多様化することによって、心や社会を扱う研究者の前には、これまでにないような新しい社会の文脈や視界が現れてきている。フィールドで出会う人々のものの見方や行為は実に様々であるが、その背後には多様な主観的立場や社会的背景、文化などがある。質的研究はこのような視点の多様性を考慮に入れ、具体的な事例を、その時間的、地域的な特性において分析し、研究対象の複雑な姿のままに、人々が生きる自然な日常の文脈の中で研究を行う (Fick, 2007 小田訳2011)。遠藤 (2007) は、質的研究の強みの一つは、従来の量的研究では必ずしも十分に掬われないできた、ある個人が日常的文脈のなかで発する生のリアリティや、その個人特有の主観的な意識や意味づけを詳らかにし得るところにあると指摘している。

質的研究は教育学や看護学など実践志向の強い分野で注目されてきたが、現在は臨床心理学においてもさかんに用いられつつある。従来、臨床心理学における主流な研究法は、Freud,S.を代表とした事例研究であり、詳細な治療過程を記述しながら事例の検討を行う個性記述的なアプローチである (野田, 2019)。しかし、本邦における事例研究は、教育的価値は大きいものの、妥当性や信頼性といったエビデンスとしての価値を保証する方法的基準に関する指針はなく、一種の技のようなものとして論じられることの方が多く、研究法としての事例研究法はあまり発展してこなかった (岩壁, 2013)。このような背景より、近年、臨床領域においても実証性が求められるようになり、実践の効果を見る場合にも、あらかじめ決められた基準だけではなく、その周りの人々の価値観に基づく語りをも収集し、対象者の体験をボトムアップでモデル化しようとする志向を持つ質的研究 (能智, 2011) が注目を集めるようになった。

質的研究の特徴は、その方法の多様性にある¹。例えば、心理学における質的分析法として比較的多く用いられる方法に KJ法とグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach: 以下, GTAとする) がある。KJ法は、日本で生まれ発展した代表的な質的研究法の一つであり、1967年に川喜多二郎が「発想法」として発表したものである (川喜多, 1967)。GTAはデータに根差して (grounded on data), 概念を作り、概念同士の関係性を見つけて理論を生成する研究手法である。KJ法にも似ているが、新しい概念や理論を生成する力とプロセス性を描画しやすいという点で優れている (福島, 2016b)。シークエンス分析は、データを分割せずに時間的な流れやつながりに注目する分析法の総称であり、ディスコース分析、会話分析、ナラティブ分析などが含まれる (能智, 2008)。これらの他にも、エスノグラフィーや課題分析、合議制質的研究法、複線

* 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科精神対象機能病学分野

¹ 個々の詳細な方法については成書を参考にして頂きたい。

径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下, TEMとする), PCソフトを活用した質的臨床研究などがある。

このように質的研究には様々な分析が存在するが、質的研究の経験の浅い研究者が質的研究に取り組む際に、収集したデータに対する分析方法の妥当性の問題が生じやすい。どのような時にどのような研究法を用いればよいかがわからないゆえに、とりあえず知っている方法で分析してみるという場合も少なくない (白井, 2012)。さらに、データ収集法に適した分析方法は何か、研究対象者数はどのくらいが適切かについても同様であろう。しかしこれまで、臨床心理学領域における質的研究において、データの収集法や分析方法、研究対象者の特性や数などについて体系的に整理し検討した報告はなされていない。また、質的研究においては、目的を明確化し、その目的にあった対象を選び、その目的と対象に合った分析法を選ぶことが重要である (福島, 2016a) ことから、リサーチクエスション (Research question: 以下, RQとする) に対してどのような分析方法が適しているかについても検討する必要があるだろう。

そこで本研究では、これまでに報告された本邦の臨床心理学領域における質的研究を概観し、データの収集法と分析方法及び対象者数との関連や、RQと分析方法の関連、結果の報告方法について検討することで、臨床心理学領域における質的研究の特徴と課題を明らかにすることを目的とした。

II 方法

(1) 文献検索方法

本研究の目的に則り、日本国内の論文に限定し、わが国で臨床心理士がもっとも多く所属し、その臨床実践活動を含めた研究が集積されている「心理臨床学研究」と、心理学の実践的研究を幅広く収載している学術誌「臨床心理学」を対象とした。2010年～2021年までを検索対象期間とした。

(2) 論文の選択基準

研究デザインが、質的研究、実践的研究、量的分析と質的分析との混合研究、心理検査のフィードバックセッションであるものを選択した。なお、事例研究と文献研究は除外した。論文の種類は、収載文字数を統一するために、「心理臨床学研究」では原著と研究論文を、「臨床心理学」では原著論文と展望研究を選択した。言語は日本語で書かれた論文とした。

上記の選択基準を用いて検索した結果、152編の論文が得られ、これら进行分析対象とした。そして、Bridget et al. (2014) のStandards for Reporting Qualitative Research (以下, SRQR) の21の報告基準を参考に、発表年、雑誌名、著者、タイトル、論文種別、対象者、対象人数、RQ、データ収集法、分析方法、図示化の方法を抽出した。

III 結果と考察

(1) データのコード化

データ収集法、分析方法、RQ、対象者及び図示化の方法について、以下の視点でコード化した。データ収集法について、半構造化面接、半構造化インタビュー法などの記載は【半構造化面接】とコード化した。例えば質問紙調査と半構造化面接など2つのデータ収集法を用いているものはそれ

ぞれ1つずつ数え上げた。個別インタビュー、個別面接は【個別インタビュー調査】、既存の論文や資料などを収集したものは【資料収集】、治療セッションの逐語録、事例に関するメモ、SV記録、心理検査のフィードバックセッションなどは【臨床実践に関する記録】、同一対象への複数回のインタビュー調査は【複数回のインタビュー調査】、半構造化面接を複数回行った場合は【複数回の半構造化面接】、フォーカス・グループ・インタビューはグループ・インタビューの一種という中畠（2019）の指摘を踏まえ、それぞれ【フォーカス・グループ・インタビュー】、【グループ・インタビュー】とそれぞれコード化した。これらに分類されなかった「試行カウンセリング後のインタビュー（IPR法）」、「面接法、日誌法」といったデータ収集法は【その他】とコード化した。

分析方法について、GTAはさまざまなバージョンが見られたが、今回はM-GTAを除き【GTA】とコード化した。また、「GTAを参考に」や「KJ法を参照して」などの記載はそれぞれ【GTA】、【KJ法】とコード化した。「アンケート内容の分析」、「質的データの考察」、「カテゴリーに類型化」などの記載は、【その他質的データ分析】とコード化した。

RQについて、「形成プロセス」や「心理変容過程」などを明らかにした研究は【プロセス】とコード化した。「支援のありかた」や「クライアントの特徴の比較」などを明らかにした研究は【様相】とコード化した。

対象者について、同質の対象者同士をまとめてグループを作り、さらに類似のグループ同士をまとめてより大きなグループを作成した。最終的に【支援者】、【当事者】、【非臨床群】とコード化した。【支援者】は領域によって、【非臨床群】は年代によって下位項目を作成した。【当事者】は精神的・身体的問題によって分類し、心理療法の受け手は「クライアント」、性産業で働く女性、ステップファミリーの母親など特殊な経験や属性を持つ対象者は「特殊な属性」として下位項目を作成した。

図示化の方法について、カテゴリー表と結果図、カテゴリー表とモデル図などの記載は【カテゴリー表と図】とコード化した。カテゴリー表以外の表とモデル図などの記載は【表と図】、概念関係図や結果図などは【図】、結果の表やプロセス表は【表】、発言例の表や逐語記録表などの記載は【発言例の表】とコード化した。

コード化したものをそれぞれの視点ごとにCode frequency table (Miles et al., 2020)を作成し、コード度数を算出した。

（2）データ収集法と分析方法

分析対象152編のうち、一つの研究論文内で2つ以上のデータ収集法と分析方法が用いられている21編を除いて度数を算出し、クロス集計表を作成した（表1）。データ収集法は、【半構造化面接法】が74編、【臨床実践に関する記録】が18編、【その他】が10編などであった。なお、除外した21編のうち、一つの研究論文内で2つ以上のデータ収集法が用いられていた10編の内訳は以下の通りであった。【質問紙調査】と【半構造化面接】を用いたものが4編、【質問紙調査】と【個別インタビュー調査】が1編、【質問紙調査】と【臨床実践に関する記録】が1編、【グループ・インタビュー】と【個別インタビュー調査】が2編、【半構造化面接】と【制作後の面接】が1編、【半構造化面接】と【構造化面接】が1編であった。これらより、質問紙調査は種々のデータ収集法を組み合わせる傾向が窺われた。

データ分析方法についても先述と同様の手順で21編を除いて度数を算出した。データ分析方法是、【GTA】が41編、【M-GTA】が34編、【KJ法】が10編、【その他質的データ分析】が21編などであった。なお、除外した21編のうち、一つの研究論文内で2つ以上のデータ分析方法が用いられていた12編の内訳は以下の通りであった。【KJ法】と【M-GTA】が1編、【KJ法】と【量的分析】が3編、【KJ法】と【合議性質的研究法】が1編、【KJ法】と【単一事例による例証】が1編、【KJ法】と【その他質的データ分析】が1編、【合議性質的研究法】と【課題分析】が2編、【合議性質的研究法】と【GTA】が1編、【合議性質的研究法】と【量的分析】が1編、【質的コード化の技法（Coffey & Attkinson, 1996）】と【質的データ分析（佐藤, 2008）】及び【量的分析】が1編であった。

これらより、KJ法が種々のデータ分析方法と相互補完的に組み合わせて用いられる傾向が窺われた。KJ法はデータの分類と集約を通して、分析前には気づいていなかった知見を得ることが可能であることと、そもそもフィールドワークに関して得られたデータの分析法である（川喜田, 1967）ことから、KJ法の心理臨床実践との親和性の高さが改めて示されたと考えられた。

次に、データ収集法によってどの分析方法を用いているかについても先述と同様の手順で21編を除いて度数を算出した。【半構造化面接法】で収集したデータの分析方法是、【GTA】が33編、【M-GTA】が25編などであった。【臨床実践に関する記録】の分析方法是【その他質的データ分析】が11編などであった。【その他】の分析方法是、【その他質的データ分析】が4編、【GTA】、【M-GTA】、【KJ法】、【課題分析】、【演繹的分析、帰納的分析】、【音声分析、発話内容分析】は各1編ずつであった。

表1：データ収集法と分析方法

		分 析 方 法 コ ー ド																			
		G T A	M - G T A	K J 法	T E M	事例のメタ分析	課題分析	PAC分析	質 ^a 的記述的研究	シークエンス分析	SCAT	マッピング法	計量テキスト分析	演繹的分析、帰納的分析	音声分析、発話内容分析	質 ^a 的データ分析法	現象学的方法	質 ^a 的内容分析	その他質的データ分析	合 計	
データ収集法コード	半構造化面接	33	25	2	4	0	0	1	2	1	1	1	0	0	0	1	1	0	2	74	
	臨床実践に関する記録	1	2	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	18	
	質問紙調査	1	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	9	
	個別インタビュー調査	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	
	資料収集	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	4	
	複数回のインタビュー調査	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
	インタビュー (対人プロセス想起法を援用)	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
	複数回の半構造化面接	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	PAC分析のプロトコル	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	グループ・インタビュー	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
	フォーカス・グループ・ インタビュー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	その他	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	4	10
合 計		41	34	10	6	4	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	21	131	

注：^a グレグ(2007), ^b 氏家・高濱(1994), ^c 佐藤(2008), ^d 岩満ら(2009)

これらのことより、半構造化面接などで体系的に収集したデータの分析にはGTAやM-GTAがより多く用いられており、臨床実践に関する記録のように計画的に収集することが困難なデータの分析には「その他質的データ分析」とコード化される多様な方法を用いて分析を行っていることが推察された。取捨選択することなく拾い上げた分厚い記述に対して、客観的な対象として突き放して眺めた客観的な知ではなく、具体的な関係のなかで得られる「関係的な知」（能智，2013）を求めて試行錯誤しながら分析を行う質的研究の研究者の姿勢が窺われた。

（３）分析方法の年代別推移

分析対象152編のうち、例えば【M-GTA】と【KJ法】など2つの分析方法を用いているものはそれぞれ1つずつ数え上げた。その結果、【GTA】は43編、【M-GTA】は38編、【KJ法】は19編、【TEM】は6編、【合議制質的研究法】は5編、【事例のメタ分析】と【課題分析】及び【量的分析】は各4編、【PAC分析】は3編、【その他質的データ分析】は24編であった。これら以外の分析方法は1編～2編であった。次に、4編以下の分析方法と【その他質的データ分析】を合算して「その他」とした上で、年代ごとに分析方法を抽出した（図1）。「その他」に分類される分析方法を用いた論文数の1年間に占める割合は、2013年を除く2010年から2015年においては35.7～50.0%で推移していたのに対し、2020年を除く2016年から2021年においては16.7～27.3%の割合で推移していた。このことより、質的研究における多様さは近年漸減傾向にあることが推察された。遠藤（2013）は、臨床心理学的な研究に、様々な体系化された質的研究法がにわかに広まり、着実に成果を挙げつつあることはほぼ確かなことであるが、一方で、いくつかのドミナントな手法に従うだけのきわめて形骸化し硬直した質的研究を量産させる道筋をも作り出してしまったのではないかと指摘している

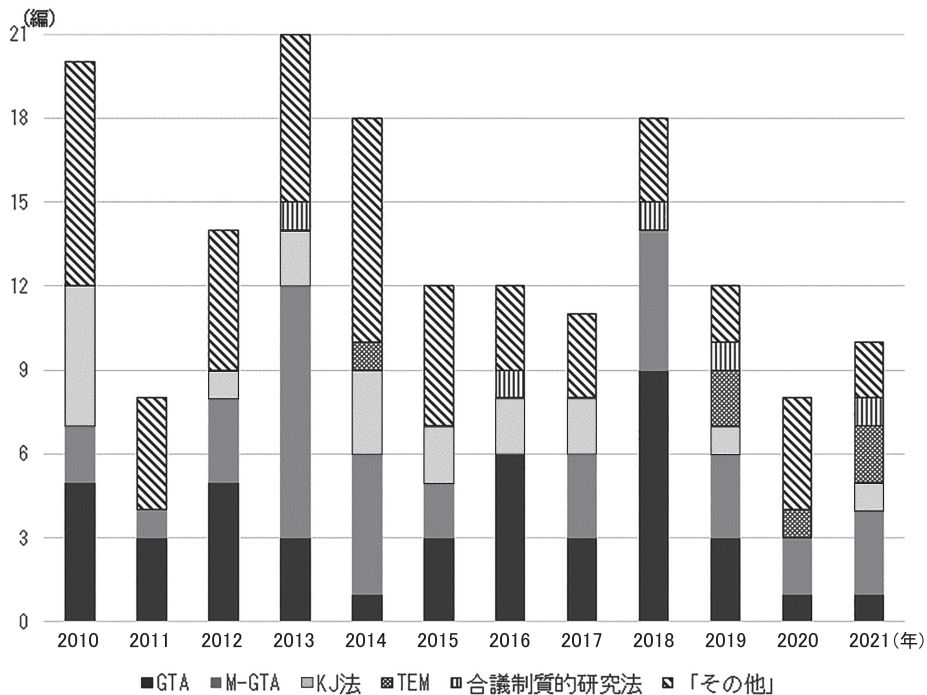


図1：年代別のデータ分析方法

が、本結果はこの指摘を一部裏付けるものであらうと思われた。

(4) RQと分析方法

分析対象152編のうち、【プロセス】を明らかにした研究は53編、【様相】を明らかにした研究は99編であった。次に、RQに対して、どのような分析方法を用いたかについて度数を算出し、クロス集計表を作成した。なお、一つの研究論文内で2つ以上の分析方法が用いられている12編を除いた(表2)。「プロセス」を明らかにする際に用いられた分析は【GTA】が16編、【M-GTA】が18編であった。「様相」を明らかにする際に用いられた分析は【GTA】が26編、【M-GTA】が19編、【KJ法】が11編、【その他質的データ分析】が20編であった。これらのことより、GTA及びM-GTAはプロセスを明らかにする場合にも様相を明らかにする場合にも用いられる分析方法であること、KJ法はプロセスよりも様相を明らかにする場合により多く用いられていることと、様相を明らかにする場合は、より多様な分析方法が用いられている傾向が推測された。

なお、除外した12編の内訳は、【KJ法】と【その他質的データ分析】の重複が1編、【KJ法】と【M-GTA】が1編、【KJ法】と【単一事例による例証】が1編、【KJ法】と【量的分析】が3編、【KJ法】と【合議制質的研究法】が1編、【GTA】と【合議制質的研究法】が1編、【課題分析】と【合議制質的研究法】が2編、【合議制質的研究法】と【量的分析】が1編、【質的コード化の技法(Coffey

表2：リサーチクエスションと分析方法

コード	プロセス	様相
GTA	16	26
M-GTA	18	19
KJ 法	1	11
TEM	6	0
事例のメタ分析	2	2
課題分析	2	0
PAC 分析	1	2
質的記述的研究 (グレッグ, 2007)	0	2
シークエンス分析	0	1
SCAT	0	1
マッピング法 (氏家・高濱, 1994)	1	0
計量テキスト分析	0	1
演繹的分析, 帰納的分析	0	1
音声分析, 発話内容分析	0	1
質的データ分析法 (佐藤, 2008)	0	1
現象学的方法	0	1
質的内容分析 (岩満ら, 2009)	0	1
その他質的データ分析	3	20
計	50	90

& Atkinson, 1996)】と【質的データ分析（佐藤，2008）】及び【量的分析】の重複が1編であった。

（５）調査対象者と調査対象者数

調査対象者の下位項目ごとに度数を算出した（表３）。なお、一つの研究論文内で２つ以上の調査対象者が含まれていたものはそれぞれ一つずつ数え上げた。【当事者】を調査対象とした論文のうち、「特殊な属性」を調査対象としたものが14編、「クライアント」が11編などであった。調査対象者数の中央値は12.0人、範囲は1～512人であった。【支援者】を調査対象とした論文のうち、「心理・福祉」を対象としたものが41編、「教員」が7編などであった。調査対象者数の中央値は15.0人、範囲は1～743人であった。【非臨床群】を調査対象とした論文のうち、「短大生・大学生・大学院生」を対象としたものが22編、「成人」が7編などであった。調査対象者数の中央値は18.5人、範囲は4～500人であった。

これらのことより、調査対象者数のばらつきが大きいことと、「特殊な属性をもつ当事者」を含め様々な課題の当事者を対象とした論文が最も多く、臨床心理学領域の質的研究における調査対象は多様性に富んでいることが推察された。また、支援者を調査対象とした論文のうち、「心理・福祉」領域の支援者を調査対象としたものが8割近くを占めており、心理支援のありかたへの関心の高さが窺われた。非臨床群の場合は、アクセスしやすく、言語能力が十分に備わっている学生から成人の年齢層を対象とする傾向があり、このことが当事者や支援者と比べて調査対象者数の若干の多さにつながっているのではないかと思われた。

表３：調査対象者の内訳（項目）

コード	下位項目	編数
当事者	特殊な属性	14
	クライアント	11
	精神疾患	9
	発達障害	9
	不登校	6
	身体的問題	5
	LGBT	4
	引きこもり	4
	遺族	3
	虐待	2
	計	67
支援者	心理・福祉	41
	教員	7
	医療	3
	警察	1
	非専門家	1
	計	53
非臨床群	短大生・大学生・大学院生	22
	成人	7
	児童・生徒	3
	大学生～成人	3
	高齢者	1
	計	36

(6) 調査対象者とデータ収集法

調査対象者別のデータ収集法について度数を算出し、クロス集計表を作成した(表4)。なお、一つの研究論文内で2つ以上のデータ収集法が用いられていた場合は、それぞれ一つずつ数え上げた。全ての調査対象者において最も多かったデータ収集法は【半構造化面接】であった。【支援者】においてのみ【グループ・インタビュー】と【フォーカス・グループ・インタビュー】でデータ収集されていた。

これらのことから、半構造化面接は調査対象者の違いに関わらず質的研究におけるデータ収集法の主流であることが示唆された。一方、グループでのインタビューが支援者を対象とした研究にのみ用いられたという結果は、当事者や非臨床群へのグループでのインタビューの実施の難しさが反映されていると思われる。また、質問紙調査は少ないながらも全ての調査対象者において実施されていたことから、より用いられやすい手法であることが窺えた。

表4：調査対象者別のデータ収集法

コード	当事者	支援者	非臨床群
半構造化面接	39	27	18
構造化面接	0	1	0
個別インタビュー調査	3	6	0
複数回のインタビュー調査	2	1	0
複数回の半構造化面接	2	0	0
インタビュー（対人プロセス想起法を援用）	0	0	3
制作後の面接	0	0	1
グループ・インタビュー	0	3	0
フォーカス・グループ・インタビュー	0	2	0
PAC分析のプロトコル	0	0	1
臨床実践に関する記録	13	7	2
質問紙調査	5	5	8
資料収集	3	1	0
その他	3	4	6

(7) RQに対する図示化の方法

RQに対する結果の図示化の方法についてクロス集計表を作成した(表5)。【カテゴリー表と図】を用いて【プロセス】を明らかにしたものが26編、【様相】を明らかにしたものが35編であった。【カテゴリー表】を用いて【プロセス】を明らかにしたものが3編、【様相】を明らかにしたものが25編であった。これらのことから、プロセスを明らかにする場合も様相を明らかにする場合も【カテゴリー表と図】を用いて示すことが多い傾向にあること、様相を明らかにする場合には、プロセス

を明らかにする場合に比べて、カテゴリー表のみで結果を示すことが多い傾向が示唆された。

表5：リサーチクエスションと図示化

コード	プロセス	様相
カテゴリー表と図	26	35
カテゴリー表	3	25
図	10	9
表	0	5
表と図	1	3
KJ 法による図	2	3
TEM 図	4	0
TEM 図と表	2	0
発言例の表	1	5
シーケンス図，ナラティブ表	0	1
クラスター分析による散布図	0	1
対応分析図	0	1
デンドログラム	1	2
描画例	0	1
その他	3	0
無	1	8
計	54	99

IV 総合考察

今回の研究で明らかとなったのは以下の2点であった。1点目は、半構造化面接を用いて収集したデータをGTAやM-GTAで分析した論文の多さである。GTAは分析対象とする現象や分析の手順を開示しやすく、推論の検証にもある程度耐え得る方法（福島，2016b）であることを反映していると考えられた。一方、本研究では特定のコードとして整理が難しかった分析方法も多かったことは、本邦における質的研究の分析方法の多様さを表していると思われ、研究者が実践で得たデータを試行錯誤して分析をしている現状が窺われた。能智（2013）は、質的研究は元来、自己の視点や従来の研究者コミュニティの視点を相対化し、これまでの度量衡があてはまらない対象に対して新たな枠組みからの仮説生成を行おうとする枠組みであり（略）、これまで使われてきた方法や前提に固執するのではなく、新たな手続きを模索するのは自然なダイナミズムとも言えると述べている。このことを踏まえると今後は、本研究において少なくなかった「その他質的データ分析」として整理した論文や、複数の分析方法を組み合わせた論文に着目して詳細な検討を行うことにより、臨床心理学領域の質的研究における多様さの特徴を明らかにすることが可能となるだろう。

但し、この多様さは年代を経るごとに漸減傾向にあることも示唆された。その背景には、質的研究が大学等の高等教育機関の心理学関連コースで教えられるようになってきたのは比較的最近のことであり（能智，2019）、質的研究に関する教育が量的研究に比して体系的には行われていないことが考えられる。臨床実践で得られたデータを対象に研究を行う際、質的研究の多様な分析方法の理解がない場合は、学術誌などで目にしやすい、もしくは比較的形式化している分析へ偏りやすいことは自然なことかもしれない。しかし、臨床現場で生じた複雑で曖昧模糊としたRQに対して適切な分析方法を選ぶためには、事例研究や量的研究も含めて、問いの設定やその問いに対応する分析方法の妥当性について学ぶ機会を得ることが重要であろうと思われた。

2点目は調査対象者数のばらつきの大きさである。能智（2011）は、調査対象者数の適切さはあくまで、分析に使われるデータの豊かさや深さ、さらには最終的に構成された理論やモデルとの関係の中で判断されるべきであると指摘している。本研究における調査対象者数のばらつきの大きさは、研究者の判断の多様性を表しているとも考えられるが、調査対象者数の理由と、それ以上のサンプリングが必要ない場合の判断基準を示す必要があるとの指摘（Bridget et al., 2014）もあることから、調査対象者数の判断基準を示す必要があるだろうと思われた。

質的研究の魅力は、「リアルさと即時性」と「発見的な研究となりやすいこと」（福島，2016a）であるが、一方で、増えつつある質的研究の中には、質的方法の適用に首をかしげたくなる報告がないわけではなく、質的方法テクニックの適用で終わってしまっている研究もある（茂呂，2008）。質的研究でもっとも重要なのは、研究者が現象のどこに注目し、それをどのような角度から分析したかであり（磯野，2016）、良質の質的研究は、方法ではなく良い問いからしか生まれ得ない（磯野，2017）。質的研究の質の向上のためになすべきことは、対象者とじっくり向き合って得られたデータから「『何を見ようとして、どのような手続きでどのように分析したのか』の意識的な検討とその過程の開示」（福島，2016a）であり、新しい知見をどのように描き出すべきかについて真摯に検討を重ねることであろうと思われた。

V 本研究の課題と今後の展望

本研究の課題は5点挙げられる。1点目は、分析の対象とした学術誌が2誌のみと少ないことから、本研究で得られた結果とその解釈は限定的に捉える必要がある。実際には臨床実践や臨床心理学に関連する質的研究論文は2誌に限らず数多くあることは明白であるため、今後は分析対象とする論文の基準を整理し、分析対象誌を増やすことで、臨床心理学領域における質的研究の特徴のさらなる具体化につながると考えられた。2点目は抽出した項目の妥当性である。Bridget et al.（2014）が作成したSRQRには、本研究で抽出した項目の他に、研究パラダイム、サンプリング戦略、データセキュリティを含む倫理的問題への対処方法、データ解析の信頼性を高めるための手法等も含まれているが、本研究では言及できなかった。Bridget et al.（2014）は、SRQRの項目を論文中に記載することは質的研究論文の質を向上させるものであると指摘している。本邦におけるSRQRの項目の記載状況、さらにはSRQR以外の事項の記載内容などを検証することによって、本邦における質的研究論文の質の担保のありかたについて検討することができだろう。3点目は

コード化の方法についてである。本研究では、例えばRQを「プロセス」と「様相」の2つの視点からコード化したが、白井（2012）は、「理解の方向性」や「研究の目的」という視点で整理し、サトウ（2019）は、「構造－過程」と「実存性－理念性」の二次元で整理をしている。RQのみならず他のコード化も合わせてさらなる精緻化が必要であろうと思われた。4点目は事例研究の扱いについてである。本研究では事例研究を除外して分析を進めたが、野田（2019）は、事例研究を質的研究に含めるか否かという混在した議論があると述べていることから、事例研究の扱いについてさらなる議論が必要であろうと思われた。5点目は図示化の方法についてである。本研究では、表や図の有無を中心に抽出したが、どのような図示化の方法が、RQに対する答えを明示できるのかについて議論が必要であろう。

今後の展望として、今回は臨床心理学領域における質的研究を概観し、その傾向と特徴を探索することを目的としたが、例えば調査対象者の属性を当事者群のみを抽出するなど、焦点を絞った検討を重ねることで、詳細な知見を得ることができると考えられる。このような検討を通して、臨床心理学領域における質的研究の特徴や限界が明確となり、事例研究及び量的研究との相互補完的な関係の整理への寄与が期待される。

参考文献

- Bridget, C. O., Ilene, B. H., Thomas, J. B., Darcy, A. R., & David, A. C. (2014). Standards for reporting qualitative research: A synthesis of recommendations. *Academic Medicine*, 89, 1245-1251.
- 遠藤 利彦 (2007). イン트로ダクション—「質的研究という思考法」に親しもう— 遠藤 利彦・坂上 裕子 (編) はじめての質的研究法—生涯発達編— (pp.1-43) 東京図書
- 遠藤 利彦 (2013). 「質」と「量」を組み合わせる 臨床心理学, 13, 360-364.
- Flick, U. (2007). *Qualitative Sozialforschung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. (ウヴェ, F. 小田 博志 (監訳) (2011). 新版 質的研究入門 — <人間の科学>のための方法論 — 春秋社)
- 福島 哲夫 (2016a). 臨床現場で役立つ質的研究法とは—質的研究法と量的研究法の長所短所から臨床と研究の相互高め合いまで— 福島 哲夫 (編) 臨床現場で役立つ質的研究法—臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで— (pp.1-20) 新曜社
- 福島 哲夫 (2016b). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ—ミクロな実践プロセスの分析・記述— 福島 哲夫 (編) 臨床現場で役立つ質的研究法—臨床心理学の卒論・修論から投稿論文まで— (pp.35-49) 新曜社
- 磯野 真穂 (2016). 臨床家のための質的研究 (前編) —「方法」に走る前に身につけたい3つの構え— 医学教育, 47, 353-361.
- 磯野 真穂 (2017). 臨床家のための質的研究 (後編) —まず「問い」から始めよう— 医学教育, 48, 91-99.
- 岩壁 茂 (2013). 臨床心理学における研究の多様性と科学性—事例研究を超えて— 臨床心理学, 13, 313-317.
- 川喜多 二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために— 中公新書
- Miles, M. B., Huberman, A. M., & Saldaña, J. (2020). *Qualitative data analysis: A method sourcebook* (4th ed.). SAGE.

茂呂 雄二 (2008). 教育心理研究における質的方法の意味 教育心理学年報, 47, 148-158.

中嶋 洋 (2019). 初学者のための質的研究26の教え 医学書院

野田 実希 (2019). 臨床心理学において質的研究はどのように語られてきたか —質的研究の認識論における臨床的可能性に向けて— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 65, 137-149.

能智 正博 (2008). 質的分析法 下山 晴彦・能智 正博 (編) 心理学の実践的研究法を学ぶ 臨床心理学研究法 1 (pp.225-240) 新曜社

能智 正博 (2011). 質的研究法 臨床心理学を学ぶ6 東京大学出版会

能智 正博 (2013). 臨床心理学における質的研究のあり方と可能性 臨床心理学, 13, 352-355.

能智 正博 (2019). 質的研究の評価をどう考えるか—「APAスタンダード」を素材として— 質的心理学フォーラム, 11, 45-55.

サトウ タツヤ (2019). 質的研究法を理解する枠組みの提案 サトウ タツヤ・春日 秀明・神崎 真実 (編) 質的研究法マッピング—特徴をつかみ, 活用するために— (pp.2-8) 新曜社

白井 祐浩 (2012). 質的データ収集法マップ及び質的研究法分析法マップ作成の試み—質的研究法の選び方— 九州産業大学大学院臨床心理学論集, 7, 3-14.